

## ●春日部市民文化講座（第4回）

◆日 時：2013年1月30日(水) 10時（ぼぼら春日部6階会議室）～11時

◆テ ー マ：講演「桐箆笥と生きる」

講師：島田 利雄さん（春日部桐たんす組合・会長）

◆ゲスト紹介：1949年1月6日、埼玉県春日部市生まれ。(株)島田仁三郎商店・代表取締役、(株)リッカ・代表取締役、春日部桐たんす組合・会長を務める。平成19年3月皇室のスウェーデン国賓ご案内に際し春日部桐箆笥の説明。春日部桐箆笥工業協同組合の設立や運営に尽力するとともに、苦境に立った協同組合を清算し、新たな春日部桐たんす組合を設立する。また、伝統的技術・技法の研究に努めるとともに、昭和54年8月に経済産業大臣指定伝統的工芸品の認定の為に力を注ぎ、春日部桐箆笥の技術技法を確立するとともに、技術継承に貢献する。



## ■伝統的工芸品「春日部桐箆笥」

ご紹介いただきました島田でございます。23年前に脳出血で倒れたため、多少話が聞き取りにくいこともありますがお許しいただきたいと思います。伝統的工芸品とは、昭和49年に国で法律「伝統的工芸品産業の振興に関する法律(伝産法)」が定められ、主として日常生活で使われるもので、製造過程の主要部分が手作りであり、100年間以上の伝統的技術または技法によって製造され、伝統的に使用されてきた原材料を使っており、一定の地域で産地を形成していることなどが審査されて認定される工芸品であります。昭和50年に木曾漆器が第1号

に認定され、現在では212の品目が指定されておりますが、「春日部桐箆笥」も昭和54年8月3日に指定を受けております。指定を受ける中で一番難しかったことは、100年以上前の江戸時代から産地を形成していたのかということでしたが、情熱をもって調べていった結果、それを証明でき無事に指定にこぎつけることができました。

## ■産業の将来を考えて

山田さんや私が「伝統的工芸品」としての指定にこだわったのは、昭和40年代は東京のデパートで飛ぶように桐箆笥が売れていました。春日部という産地名がなくてもお客様は購入してくれましたが、10年後に後継者が育つのだろうか、箆笥が10年後も売れるのだろうかという心配がありました。その心配は、現実のものとなりましたが、そうしたことを考えて、今から30年も前に国の指定を受けて「春日部」という産地名を広めようと考えたわけです。

## ■春日部の桐箆笥の歴史

春日部桐箆笥は、江戸時代初期、日光東照宮を作るために集まった職人が、日光街道の宿場町である春日部に住みつき、周辺で採れるキリの木を材料とした指物や小物を作り始めたのが始まりと言われていたのですが、箆笥が庶民の生活に広まったのは江戸時代末期から明治時代に入ってからです。ですから江戸時代初期に、この地域で産地形成があったという証拠を探すのには苦労をしました。しかし、安永6年(1777)の「公用艦上」という役所の記録に「箱差冥加永として永五十文を納めた」という記録が備後で見つかりました。また、明和9年(1772、安永元)という年号や製作者が書かれた江戸時代の代表的な門(かんぬき)箆笥も岩槻で見つかりました。さらに、天保13年(1842)に修理された小湊観音院の「聖徳太子堂」の修理の寄附帳の中に、指物屋長松の名前がありました。この長松さんは、山田箆笥店のご先祖です。その当時、この地域には質の良い桐が繁茂していたことや江戸への舟運があったことが、春日部で桐箆笥産業が起こったものと考えられます。

## ■桐箆笥には実家の空気や愛情を！

桐箆笥には着物が仕舞われるのですが、着物というのは江戸時代はもちろん、明治初期までとても大切に高価なものでした。桐箆笥は、嫁ぐときに実家からお嫁さんに持たされるわけですが、嫁入りの着物と一緒に実家の空気や愛情、幸せになってほしいという親の願いが込められていたのですね。桐箆笥には隠し箱があります。製作者と持ち主しか分からない箱なのですが、修理でお預かりした時に、昔の人たちが隠した大切な品物が入っているなんてこともありました。桐箆笥や着物を扱うには、手を清め、身構えて扱ったものです。人々の思いが凝縮され、大切にされてきました。

## ■新しい時代の後継者育成

6年前に休眠状態の協同組合を解散し、新たに「春日部桐たんす組合」を設立し、新しい取組に着手してきました。特に3年前には後継者を育成するために「春日部市桐箆笥技術継承者育成講座」を始めました。将来的には、桐小箱を作っている若手や桐箆笥の製作をしている人たちを融合して、「指物師」という認定制度を作りたいと考えています。いずれにしても、素晴らしい技術を次の世代に残していきたいと考えております。

将来の産業を見据えて奮闘努力された組合員の方々のお話に感動しました。